

## 北岡理事長が「東京サステナブル会議」に登壇

01



講演を行う北岡理事長

JICAの北岡伸一理事長は、6月29日、日経B/P社主催の「東京サステナブル会議」に登壇し、基調講演を行いました。同会議には、企業などから約400人が参加し、持続可能な開発目標（SDGs）の目指すサステナブルな社会の実現に向けて、日本企業がどのように貢献できるか活発な議論が行われました。

北岡理事長は講演で、ミレニアム開発目標（MDGs）の下で達成したゴールがある一方、成果には地域差があり、一国内での格差も拡大していることに言及しました。

また、SDGs達成のためには、政府に加え、企業、市民、研究機関などの連携が必要であり、特に日本企業を持つ技術が果たす役割は大きいことを強調。JICAと日本企業の連携の具体例として、味の素の栄養食品を活用したガーナでの栄養改善プロジェクトや、質の高い教育が必要とされているバングラデシュでの公文書の導入の他、インドの地下鉄など大規模インフラ整備にきめ細かな配慮を行う日本の



会場の様子

開発の事例を紹介し、企業にとっても新たなビジネスチャンスになっていることを示しました。

さらに、開発途上国でもイノベーションが進んでおり、現地のノウハウが日本の課題解決にもつながる可能性があるとの考えを述べ、SDGsへの貢献が国内でのビジネスチャンスにもなるだろうとまとめました。

会議では他にも、国際航業代表取締役会長の呉文綱氏が「CSRのみならず本業を通じた企業の貢献をすべく、企業理念や事業方針の中心に社会課題の解決を捉える必要がある」と講演。企業からは日産自動車、エイピーピー・ジャパン、富士通、ソニーが登壇し、持続可能な社会に貢献する新しい製品やビジネスモデルなど、自社の取り組みを発表しました。

パネルディスカッションでは、長期ビジョンの作り方と使い方をテーマに、社員を巻き込んだビジョンの策定プロセスについて議論。多くの参加者から、SDGsはチャンスであるとの声が聞かれました。

## 青年海外協力隊が「ラモン・マグサイサイ賞」を受賞

02



フィリピン・カピス州の口ハス市特殊教育学校で、養護隊員（現障害児・者支援）として活動する青年海外協力隊

JICAボランティア事業の一部である青年海外協力隊が「ラモン・マグサイサイ賞」を受賞しました。

アジアのノーベル賞とも呼ばれる同賞は、フィリピンのラモン・マグサイサイ大統領を記念して1958年に創設された賞で、アジア地域で社会貢献などに傑出した功績を挙げた個人や団体に対し、毎年、マニラ市のラモン・マグサイサイ賞財団から贈られるものです。過去には、マザー・テレサやダライ・ラマ14世の他、緒方貞子元JICA理事長もこの賞を受賞しています。

昨年50周年を迎えた青年海外協力隊事業は、現地の人々と共に生活し、共に働くという理念の下、長年にわたってアジア地域の経済と社会の発展に貢献してきました。今回の受賞は、その功績が認められたものです。

これまでに派遣した青年海外協力隊は、全世界で累計延べ4万1000人を超えます。アジア地域には延べ1万2199人を派遣しており、現在はアジア18カ国で581人が活動中です（2016年7月31日現在）。

## コンゴ民主共和国に国際緊急援助隊・感染症対策チームを派遣

03



ワクチンキャンペーンでの聞き取り調査の様子

JICAはコンゴ民主共和国における黄熱の流行に対し、緊急支援を行いました。世界保健機関（WHO）をはじめ、複数の機関も支援を開始しています。

コンゴ民主共和国では黄熱の感染が拡大しており、6月20日、同国政府は黄熱の流行を宣言しました。6月24日時点で、疑い症例を含む1307人の患者が報告されており、うち75人が亡くなっています。

これを受けて、日本は同国での黄熱感染拡大の状況を把握し、対応を検討するため、7月10日に調査チームを派遣しました。調査結果と同国政府からの支援要請を受け、日本は7月19日、岸田文雄外務大臣が国際緊急援助隊・感染症対策チームの派遣を決定しました。JICAは翌20日から、感染症専門家などから成る感染症対策チームを派遣し、支援にあたりました。